

加代は浩史が説明した外川の経歴を反すうしてみる。遊戯機械の会社といえば、父の会社と取引のあったクラウン商事、その社長は、外川…あのんだ。

加代が憲志と交際していたころ、父は外川の依頼で新しい機械の開発に着手していた。結婚して家を出た後、しばらくの間は、父と外川は好調な営業成績をあげていたらしい。直接その人に会ったことはないが、父から一部始終を聞かされていた。

「それで…お母さんの名前もだんだんと思ひ出し出してくれたよ。ああ、そう言えば、政一さんには娘さんがおりましたねって…僕の顔を穴のあくほど見詰めてたよ…」

「本当に？」

加代はあとの言葉が出てこない。それにしても外川が今もって現役で商売をしていると言われても実感が湧いてこない。倒産したクラウン商事と共に姿を消した男だからもうすでにこの世にはいないような勝手な先入観が胸の内にあっただのかもしれない。

加代は温まった布団から抜け出てパジャマのまま暗い玄関の電話の前に立っている。足元が冷えてくる。浩史は続ける。

「それで、会長が、その節は大変お世話になったとか言ってたよ。お蔭で今の自分の会社があるようなものだって…」

人情より儲けを優先して商売してきた男だろうに不似合いな物言いだ。父と外川が関わったがために…、あの頃、父と自分は…。加代は返事につまる。

「そう……。もう、昔のことだからよく覚えてないけど…それに直接私とは関係ないことや…」

加代は悟った風な言い方になる。浩史の話では窮地をきり抜けたやり手経営者ということになるが、当時の外川は債権者から逃れるため一時は行方をくらましてい

たと加代は聞いている。それに反して、目先の利かかった父は相当な損害を被り経営は傾き、その穴埋めに次々と借金を増やし、その借金の保証人を憲志が引き受けなかった。それが父娘の仲が拗れる直接のきっかけだ。親子の絆が切れる原因になったものだ。

仕事が取れたのは何よりのことなのだが……。もつれ合う事情をここで息子に打ち明けるわけにはいかない。三十年近く経った今になって、加代は外川を思い出したくないというのが本音だ。電話の話だけでは付き合いの程度はよく掴めない。大丈夫だろうか。このままいつて先々また浩史までもが、外川に裏切られることだつてないとは言えない。

「世間って、広いようで狭いっていうの、本ただわね」

加代は口では話を逸らしたが疑いは拭えないままだ。それにしても浩史は母親の里へ行ったこともなく、祖父母の顔も知らないのだ。孫だと身元を明かしたあと、政一の性格までお見通しの外川とどんな会話を交わしたのか。話を合わすのにきつと苦労をしただろう。政一の近況も問われただろうに……。

「会長から、政一さんにくれぐれもよろしく伝えてくれって……。頼まれたんだけど、困るんだ。けど本当のこと言えないからさあ、とにかく頷いておいたよ。お母さんから代わりに言っといてくれないかな……」

私のほうこそ困るよ、と加代はそのまま返したくなる。外川は浩史の手前もあって、そう頼んだのかも知れない。今さら、よろしくなんて……。なんとという綺麗ごとだ。

「そんなに気になるんなら、じかに外川さんが連絡を取ればいいのにねえ」

加代は口走ったあとではっと口をつぐんだ。自分のこのひと言が外川を信用して

いる浩史の素直な気持ちを踏みにじっているのではないか。加代は後悔で身が縮む思いになる。気がつくと言巻き一枚の背中がぞうとするほど寒い。加代は急にこころえが我慢できないほどに感じられ、その続きをうやむやにして、他の近況を少し訊き出して長電話を終えた。

一週間ほど経った日曜日の午後。天気がよかったので窓を開け放して掃除をしていると、浩史からまた電話が入った。

「外川さんのこと話してくれた？ お祖父ちゃんのほうは何と言ったの？」

浩史は政一の反応が気にかかるらしい。加代は口ごもりながら答えた。

「いや、ただだけど……」

それはどうしても伝えなければならぬほどの事ではないと自分に言い聞かせ、そのままにしていた。浩史の誕生、弘子の結婚、それに憲志が死んだときも、加代は実家と縁を切ったままだ。それが自分で選んだ道だから、生涯、通すつもりをしている。どんなに頼まれても今回ばかりは引き受けられない。まとまりのつかないまま、加代は弁解した。

「お母さん、頑固すぎるよ。何があったかは知らんけど、行って謝ればいいことだろうが。血のつながった親子なんだから……」

「……………」

頑固……、あの子の目からはそうみえるのか。今になって父に謝れば、あのととき、夫婦で下した判断が誤りだったことになる。悩んだ末、自分たちの生活を守ろうとしたのは罪だったというのか……親への裏切りだったのか……。

いくら息子でも自分の気持ちは分かるはずがない。どんな理屈を並べてみてもこ

の思いは浩史には届かないだろう。加代は口をへの字に歪めて黙っていると目頭が熱くなる。保証人を断わったあの日、父の怒号を背に逃げるように帰ってきた。あの辛さだけは心の奥底に巣くっている。かりに謝りに行ったとしても、「今さら何だ」と、もう一度拒否されるかもしれない。その場面を想像しただけで加代は身震いがする。だから連絡を入れる勇氣などない。

「政一さんは町の発明家とか何とかいわれておだてられている人だから、頑固な意地っ張りなんだろうなあ。親娘が揃って似たもの同志なんだ…」

浩史は困ったものだと言っただけのける。

「でもなあ、外川社長は仕事もやり手で人間もできてる。会長のほうはもつとそうだよ。それに、孫と分かっていらい、色々と気を遣ってもらって、俺、感謝してる…」

かたくなな加代も浩史にここまで言われるとひとまず引き受けざるをえなくなる。電話の向こうから浩史が呼びかけてくる。

「お母さん、聞いてるんか…」

「ん、聞えてる………」

加代の返事はだみ声になった。踏み切りの鐘が鳴り始めたようだ。北の窓が開いているせいか、いつもよりけたたましい。音は狭い玄関まで押し寄せてきて、行き場を失い、加代の足元にいつまでも漂っている。やがて下りの徳島行き列車がレールを軋ませて窓の向こうを通り過ぎ、踏切を通過して宮の森駅へ滑り込んでいく。各駅停車らしい。あれに乗れば志度へ行ける。加代の脳裏に途中駅の名が浮かんだ。加代は氣をとり直して言った。

「暇をみて、電話してみるから…もう少し待って…」

成りゆきで仕方なく引き受けたものの、受話器を置いたあと、加代は座り込んで肩を落とした。たとえ電話で伝えるといってもあまり唐突すぎてどう話を切り出したらいいものか…、母ならともかく、もし父が出たらどうしよう…。思い巡らすと胸の動悸が激しくなる。虚ろな思いのまま日が暮れ、夜は浅い眠りで疲れがとれないうちに朝を迎えた。

数日間、思い迷った。やはり浩史のためにも、まずは父に今までのことを詫びる態度をみせるのが一番いい。それには会いに行くしか方法がない。しかし今の父には、加代にそうしてもらっても、何の得もないだろう。

それから、長年、父を支えてくれた弘子のことまで忘れてはいけない。実家の家業と運命を共にし、会社の後始末にも携わってくれた。夫婦は数年前に実家を出、父から離れていると正枝から聞いているが、自分が父のもとを去ったのとはわけが違う。今頃になって自分が顔を出せば、納まる場所に納まった家族たちを惑わすことにもなりかねない。

でも、浩史が外川に良くしてもらえているのは、間違いなく父が関わっている。だから外川の言葉をどうしても伝えなければならない。過去の借りを外川は今、浩史を通じて父に償おうとしているのかもしれないとも思う。

“とにかく行こう、次の休みに行こう…”

頭のなかは堂々巡りしながらも加代は決心した。

金曜日になって、何か手土産でもと思い、昼の休憩時間に託児所の近くにある商店街の酒店へ出向いた。昔、父が飲んでた銘柄は覚えている。今も変わってい

ないその美しいラベルの日本酒を選んで、一本買いこんだ。進物用に包装された箱を胸に抱えて戻り、とりあえず更衣室の棚の隅にしまっておいた。

佐知子が退職したあと新しいスタッフがまだ入ってこないので仕事は忙しかった。世話のしやすい子供たちは理恵と早紀に分担させたが、骨の折れることはほとんどが加代の細腕にかかってきた。

ちょうど午後の昼寝が終わったとき、理恵が青い顔をして加代を呼びにきた。いってみると三歳の亮一が喘息発作を起こしていた。亮一の母親は外交に出ていたので、加代が代わりに病院へ連れて行き、点滴処置のあと静養病室で付き添った。

六時過ぎになって母親が駆けつけたのでようやく亮一を引き渡す。それから保育室に戻り急いで日誌を仕上げ、私服に着替えてブレーカーをおとす。薄暗い非常灯を頼りに通用口を出ると、外は湿り気を含んだ生暖かい空気が充満していた。

加代がアパートに戻りついた頃から小雨になった。夜中に目覚めたときには窓ガラスに打ちかかる雨の音が聞えていた。明日の土曜日は休みだから父のところへ行く日だ。もし、雨が止まなかったらどうしよう…。いやどうしても行かなければ…。加代は疲れているのに目は冴えてなかなか寝つけなかった。

空が白む頃、眠り込んだらしい。目覚めると九時近い。ベッドの横のカーテンを斜めにはぐりあげ小窓のガラス越しに空を確かめる。どんよりと曇っている。いつまた降りだしてもおかしくない感じだ。もう今日は出かけないほうが無難だと逃げ腰の気分になり始めている。

(以上平成24年1月2日放送分)